

第6号

2023.3

奈良県

世界遺産をもっと知るための

# 世界遺産ジャーナル



目次

《巻頭特集》「古都奈良の文化財」の魅力

—生き続けている文化としての宗教儀礼—

○もっと知りたい世界遺産 第6回

○「飛鳥・藤原」を世界遺産に! 第6回

奈良県

# 「古都奈良の文化財」の魅力

## －生き続けている文化としての宗教儀礼－

今回は、「古都奈良の文化財」の構成資産で現在も脈々と受け継がれている宗教儀礼や伝統行事を紹介します。

これらの宗教儀礼や伝統行事は、顕著な普遍的価値のひとつに評価基準(vi)に示されている無形文化遺産としての要素と位置付けることができます。

まず、世界文化遺産の評価基準6項目のうちの評価基準(vi)に規定された内容を見てみましょう。

**顕著な普遍的意義を有する出来事、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または実質的関連がある。**

「古都奈良の文化財」が登録された1990年代後半は、評価基準(vi)の適用の条件を非常に厳しくしていた時期で、事実、事前の審議では適用が認められなかったのですが、最終的には適用条件自体の見直しの議論もあって、適用が認められるという経緯がありました。その点でも、「古都奈良の文化財」にとっての評価基準(vi)は、その顕著な普遍的価値を特徴づける重要な評価基準であったといえるかもしれません。

1998年の登録の時に認められた評価基準(vi)の適用の根拠は、以下のとおりです。

**奈良の寺院と神社は、仏教や神道などの宗教が継続的に持っている精神力や影響を、まれに見る状態で示している。**

この今もなお続く精神的な力と、その影響について、推薦書には具体的に次の要素を挙げています。

- ・日本の**宗教的な空間の特質を現している個々の建造物**
- ・特定の自然の山や森を神格化しようとした**日本独特の文化的景観**
- ・市民の生活や精神の中に資産が活用され、**文化として生き続けている宗教儀礼や行事**

## 「古都奈良の文化財」の構成資産の寺社で継承される宗教儀礼

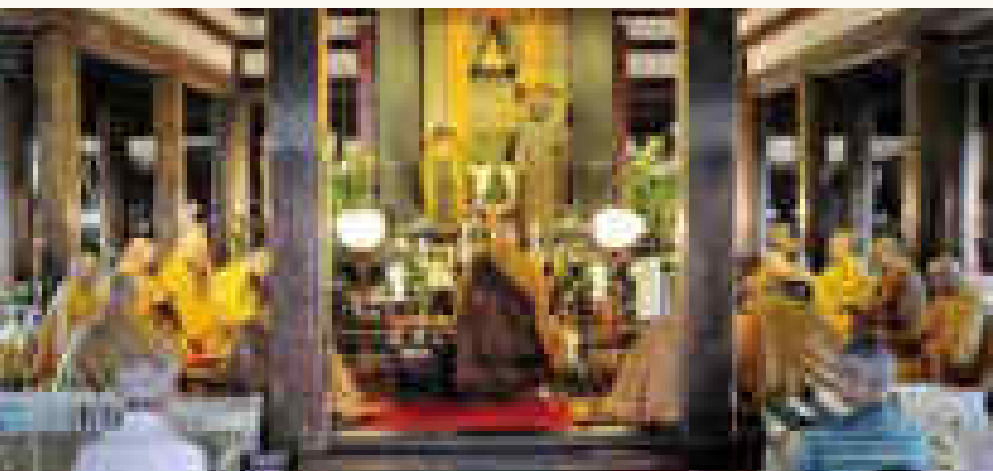
### 東大寺 Todai-ji Temple

3月に二月堂で行われる修<sup>しゆにえ</sup>二会は、752年に創始され、以降現在まで一度も途切れることなく続けられています。正式には「十一面<sup>けかほうよう</sup>悔過法要」といい、二月堂の本尊である十一面観世音菩薩に自ら犯した過ちを懺悔する宗教儀礼です。

天災・疫病・反乱は国家の病気と考えられ、そうした病気を取り除いて、鎮護国家・天下泰安・風雨順時・五穀豊穰・万民快樂など、人々の幸福を願う行事として、3月1日から2週間にわたって練行衆と呼ばれる僧侶たちによって、さまざまな行が勤められます。3月13日未明に「若狭井<sup>わかさい</sup>」という井戸から本尊へ供える「お香水<sup>こうずい</sup>」をくみ上げることから、「お水取り」の名で親しまれ、行を勤める練行衆の道明かりとして、修二会期間中の3月1日から3月14日までの毎晩「お松明」があげられます。



東大寺修二会のお松明  
(東大寺・一般財団法人奈良県ビジターズビューロー提供、木村昭彦撮影)



左上 興福寺の慈恩会(興福寺・(株)飛鳥園提供)  
右上 春日大社の万燈籠(春日大社提供、松井良浩撮影)  
左 元興寺の地藏会(元興寺提供、桑原英文撮影)

## 興福寺 Kohfuku-ji Temple

法相宗の宗祖である中国・唐の高僧慈恩大師が亡くなった11月13日に、慈恩大師の学徳を偲び讃えるために行われる法要が慈恩会です。問答を中心として行われる論議法会と呼ばれるもので、奈良仏教の特色を垣間見ることができます。慈恩会は951年に始められたと伝わり、現在は西暦の奇数年には興福寺で、偶数年には薬師寺でそれぞれ法要が営まれており、今年2023年は、興福寺で営まれることになります。

そして、およそ10年に1度、慈恩会の後に豎義という儀式が行われます。981年に制度ができた慈恩会の豎義とは、法相宗の僧侶が一生に一度だけ受けることができる「口答試験」のことで、試験問題に当たる論議の命題に対して、伝授された節回しや所作により答弁するさまは、とても独特なものです。

## 春日大社 Kasuga-Taisha Shrine

春日大社の境内には約2,000基の石燈籠が建てられているほか、本社廻廊の軒下などには約1,000基の釣燈籠が吊り下げられています。これらの燈籠すべてに灯がともされるのが、2月の節分と8月14・15日に行われる万燈籠という神事です。

数多くの燈籠は、春日大社を氏神として崇める貴族の藤原氏から寄進されたものをはじめ、武士や商人、一般庶民から家内安全、商売繁盛等のさまざまな願いをこめて奉納されたものです。

江戸時代以前は、雨乞い祈祷として万燈籠を行っていたと伝わっています。現在は、燈籠に灯をとますことで、人々はさまざまな祈願をしているのです。

## 元興寺 Gango-ji Temple

8月23日と24日に極楽坊本堂の須弥壇の上に地藏菩薩像を安置し、執り行われるのが地藏会です。地藏信仰の伝統を受けつぎ、先祖の追善供養のほか、家内安全や子供たちの健やかな成長と世界平和を地藏菩薩に祈願します。堂内での地藏菩薩への法要のほか、境内の数多くの石塔を並べた浮図田の前で行う水塔婆供養や、本堂や禅室の周りに並べた灯明皿に火を灯す万灯供養も行われます。

元興寺の地藏会は、1948年に復興された宗教儀礼です。「古都奈良の文化財」の寺社には、近代に様々な事情で途絶えてしまった行事が多くありますが、この地藏会のように、信仰が今も続いていることにより、復興された行事も多くあるのです。



薬師寺の花会式(薬師寺提供)



唐招提寺の餅談義(唐招提寺提供、植田英介撮影)

## 薬師寺 Yakushi-ji Temple

正式には薬師悔過と称される薬師寺の修二会は、花会式の名で広く知られています。これは、1107年に堀川天皇が皇后の病氣平癒を薬師寺修二会で祈願され、その結果快復された皇后が、翌年に薬草で染めた和紙で造花を作り、仏前に供えたことに由来しています。現在も、椿・梅・桜・桃・山吹・牡丹・杜若・藤・百合・菊の10種、合計1,696本の造花を作り、12個の瓶に生けて薬師三尊の前に供えます。

練行衆として出仕する僧侶は、3月25日から3月31日まで悔過法要を勤め、薬師三尊に過ちを懺悔し、国家繁栄・万民豊楽・天下泰平・風雨順次・五穀豊穰・病氣平癒を祈願します。

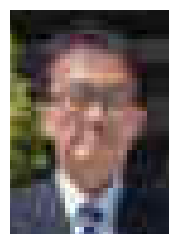
## 唐招提寺 Toshodai-ji Temple

唐招提寺が創建された奈良時代に始められたといわれる新年の行事が修正会しゅうしやうえです。元日の0時過ぎには、除夜の鐘とともに礼堂にて声明ごまくが唱えられ、護摩供がんじんが行われます。さらに鑑真和上が中国・唐から請来した仏舍利きん きしやり とうを納めた金亀舍利塔を礼堂に安置して、前年の行いを悔い改めるとともに世の平安と五穀豊穰を祈願する悔過法要が営まれます。

1月3日の夜には、礼堂の須弥壇に数多く供えられた鏡餅もちだんごの前に、供えた人の名前や全国で名の知られた48種類もの餅の名前を、甲高い声と独特の節回しで読み上げる「餅談義」が行われます。

## 本中 眞 奈良文化財研究所所長 ミニ解説

「古都奈良の文化財」では、古代から近世の木造建造物、考古学的遺跡、文化的景観、そして無形文化遺産との関わり、様々な価値が認められています。そんな「古都奈良の文化財」の特徴について、長年世界遺産の保護に携わってこられた独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の本中眞所長にお話をうかがいました。



もとなか まこと  
本中 眞

(独)国立文化財機構  
奈良文化財研究所所長

奈良国立文化財研究所を経て、文化庁主任文化財調査官、内閣官房内閣参事官として多くの世界遺産に携わる。2021年より現職。

Q1. 「古都奈良の文化財」の顕著な普遍的価値の評価に際して、特に評価基準(vi)が適用された意義とはどのようなものでしょうか？

評価基準(vi)で求められるのは、「古都奈良の文化財」が「顕著な普遍的意義」のある出来事や思想・信仰を表す場所であるかどうかということです。それは、世界的な思想・信仰である「仏教」が、アジアの最も東端にあたる日本列島にまで伝わり、古来の神道との融合を経て、今なお寺院や神社の建造物群からなる“一大宗教センター”としての役割を果たしているということなのです。

Q2. 「古都奈良の文化財」は8世紀を中心とする建造物群と考古学的遺跡が一体となって現存する希有な事例であるとされていますが、8つの構成資産のうち唯一の考古学的遺跡「平城宮跡」は、どのように位置付けられるのでしょうか？

「古都奈良の文化財」では、評価基準(iv)のもとに、平城宮跡の地割や建築の配置、寺社の建造物群のデザインが、ともにアジアの古代都城における建築とその配置計画の顕著な事例であることが評価されています。つまり、寺社に現存する建造物群のみならず、平城宮跡の地下の遺跡から明らかとなった建築群のレイアウトも含め、8世紀の顕著な事例として評価されたわけです。



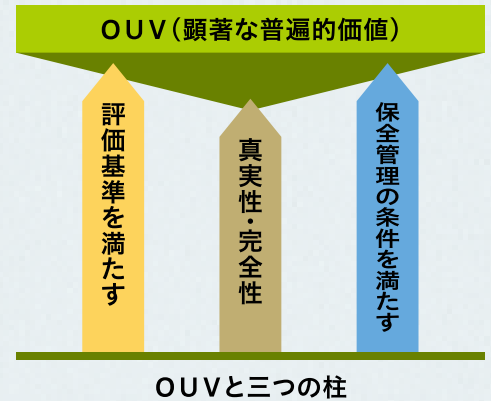
## 「真実性」とは？

第6回目の「もっと知りたい世界遺産」は、「真実性」がテーマです。

「真実性」は「完全性」とともに、OUV（顕著な普遍的価値）を支える三本柱のひとつと位置付けられている重要な項目です。

さて、「真実性」とは、英語で「Authenticity（オーセンティシティ）」といい、世界文化遺産として推薦書を提出するためには必須の条件の一つで、文化遺産が本来備えている価値を示すための指標とされています。『世界遺産条約履行のための作業指針』には、「真実性」に関することが規定されていますが、その内容や概念はとても難しいものです。

そこで以下に、補足的な説明も加えつつ、まとめてみたいと思います。



- ◆ 文化遺産の評価基準に基づいて推薦される資産は、真実性の条件を満たしていなければならない。
- ◆ すべての文化は等しく尊重されなければならない。そして最も大切なことは、文化遺産の検討と判断を行う時には、それぞれの文化自身の文脈に基づかなければならない。
- ◆ 資産の文化的価値が、以下の多様な属性について真実かつ信用性がある表現ができていれば、真実性の条件を満たしているといえる。

特に真実性の条件を満たしているか否かを問うために8つの属性(attribute)が示されています。文化遺産の特質に応じて、8つの属性のなかから適切なものを選び、特定の芸術的、歴史的、社会的、科学的側面における資産の真実性(本物であるか否か)を問うことができるとされています。

次に、これらの属性について解説します。

### 1. 形態・意匠 form and design

資産の構造やデザインが建築当初の本来の形を維持されていることが重要だとされています。できるだけ建築当初から見た目に変更されずに正確に維持されているかが問われます。変更された場合は、どの時代に、どの程度、どのように変更されたかを明らかにする必要があります。

例えば、興福寺の建造物は度重なる火災の度に再建されていますが、その建物の意匠は、古代の建築様式を継承しており、さらに伽藍全体の形態も創建当初のものを踏襲しています。



興福寺五重塔の垂木（興福寺提供）

1426年に完成した五重塔の垂木の先端を見ると、上の飛檐垂木は長方形なのですが、下の地垂木は角を丸め楕円状に加工しています。これは古代の地垂木が円形であったため、中世の大工が古代建築の意匠を模倣したものと考えられています。

### 2. 材料・材質 materials and substance

建築物や記念物を構築する部材とその素材が本物であるということが理想とされています。しかし、現代社会で維持管理していくためには多少の変更を行わざるを得ない場面もあります。その場合は、どの部分をどの程度建築当初から変更されているかを明らかにする必要があります。

欧米の遺跡では、石造のものは、そのものを積み直すことができます。しかし、日本のような木造建築の場合は、その建物を維持するために、傷んだ部材を新しい部材と入れ替えなければならないことがあります。その際、その部材が建築当初のものと同じ材料・材質のものを使用していることが大切なのです。

### 3. 用途・機能 use and function

主に現存する資産の場合は、資産が形づくられた目的や使用方法が、建造された当初から変わらずに継承されているかが問われます。

「古都奈良の文化財」の場合も、構成資産である仏教寺院や神社が、8世紀に創建されてから、現在まで変わることなく宗教施設として、それぞれの建物の用途と機能が継承されています。

### 4. 伝統・技能・管理体制 traditions, techniques and management systems

資産の形態や意匠の背景・ベースとなるのが、継承されてきた伝統や技術です。資産を修理・維持管理するには、国際憲章等で定められている国際的な共通理解に基づきつつ、個々の資産が属している文化に即した伝統的な材料や技術が用いられているか等が問われます。

2020年にユネスコの無形文化遺産に登録された、日本の「伝統建築工匠の技：木造建造物を受け継ぐための伝統技術」は、その最も典型的な例といえます。

### 5. 位置・セッティング location and setting

セッティングとは周辺環境のことで、世界遺産の構成資産単体ではなく、それが置かれた場所と、その周辺地域との関わりも重要な要素なのです。こうした周辺地域との関係性が、資産が形成された時代から変化していないか、変化している場合はどのように変化し、それが資産にどう影響するかが問われます。

「古都奈良の文化財」の場合、構成資産に含まれる建造物のほとんどが、創建当初の位置を踏襲しています。そして全ての構成資産が、8世紀の日本の首都・平城京という環境のなかで、その場を保っていることが評価されます。

### 6. 言語その他の無形遺産 language, and other forms of intangible heritage

資産が形づくられた文化の担い手たちが使っていた言語や生活様式等の多岐にわたる無形の要素が、その地域において現代も継承されているか等が問われます。ただ、残されていることが絶対条件ではありません。なぜなら、文化遺産には既に滅亡してしまった文明や国家の遺跡がとて多く存在するからです。

### 7. 精神・感性 spirit and feeling

精神や感性は、文化や社会といった枠組みを超えた人間の心性に関わる項目です。資産が存在する土地に継承された伝統や文化的な連続性と結びついた信仰や情念が、資産の価値をどのように証明しているのかが問われます。

例えば、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」(2018年登録)の場合、天主堂が禁教期の終焉後の信仰の象徴的な場所となったように、この地域で江戸時代の禁教期に守り通されたキリスト教への信仰が、この資産の真実性において最も重要な属性となっているのです。



薬師寺東塔の修理 (薬師寺提供)

奈良県文化財保存事務所による解体修理では、傷んだ部分を建築当時の技法を用いて新しいものに取り替える作業が行われています。

#### 本中 眞 奈良文化財研究所所長 ミニ解説

Q3. 世界遺産のなかでも「真実性」とは、一般の人々にはとても難しい概念です。ざぱりポイントを教えてください。

「真実性」とは、文化遺産の価値が「ほんもの」であるか否かを問う指標です。遺産の性質によって、指標は異なります。「古都奈良の文化財」の場合には、建造物群とその遺跡が創建当初から位置を変えずにデザイン・構造・材料などを伝えているか、信仰の高い精神性を備えているか、境内とその周辺が神聖な環境を保っているかなどの観点から、価値が「ほんもの」であるか否かが問われたのです。

これら以外に「8. その他の内部要素・外部要素 (other internal and external factors)」という項目もあります。

さまざまな属性から、世界遺産に登録したい多様な文化遺産が正しく本物であることを証明するのが、「真実性」なのです。



<http://www.asuka-fujiwara.jp>

# 「飛鳥・藤原」を世界遺産に！

## 「飛鳥・藤原」の構成資産候補 紹介 ④ 藤原の宮都

### 概説 日本最初の本格的都城の誕生

古代東アジア地域の国際的な緊張状態のなか、使節派遣などの交流を通して、我が国は最新の文化や技術を取り入れて、国制の充実を図る方向へと舵を切りました。その一環として、天皇が代替わりするたびに宮殿を遷していたことを改め、飛鳥盆地を首都と定めて、宮殿の場所を固定するようになりました。630年に飛鳥岡本宮を造営して遷宮して以降、694年に至るまで、飛鳥板蓋宮、後飛鳥岡本宮、飛鳥浄御原宮がほぼ同じ場所において営まれました。これが飛鳥宮跡です。

しかし、もともと広くない飛鳥盆地に宮殿や役所の施設が順次配置されていき、仏教寺院は有力氏族の各々の勢力地に造営されるなど、秩序立った都市計画や土地利用は行われていない状況でした。

673年に即位した天武天皇は、その状況を打開し、「律令」制度に基づく条坊制という碁盤の目状の都市区画による新たな都城の造営を開始します。天武天皇の死後に、その皇后であった持統天皇が都城の造営を引き継ぎ、694年に飛鳥宮から藤原宮へと遷宮しました。

藤原宮では、大宝律令が完成した701年の新年最初の日、我が国で初めて「元日朝賀」という儀礼が行われました。この時、藤原宮の中心に当たる大極殿の前に臣下が集められ、「文物の儀是に備われり」と、天皇を中心とする中央集権体制のための施設と制度・法律・文化が備わったことを日本国中に宣言するための儀式が行われました。さらに翌702年には、藤原宮から派遣された33年ぶりの遣唐使によって対外的にも「日本国」の誕生が宣言されるなど、今回紹介する藤原宮跡は、まさに「日本国」が誕生したとても重要な歴史の舞台なのです。

### ふじわらきゅうせき ふじわらきょうすざくおおじあと 藤原宮跡・藤原京朱雀大路跡

### Fujiwara Palace Site and Suzaku-oji Avenue Site of Fujiwara-kyo Capital

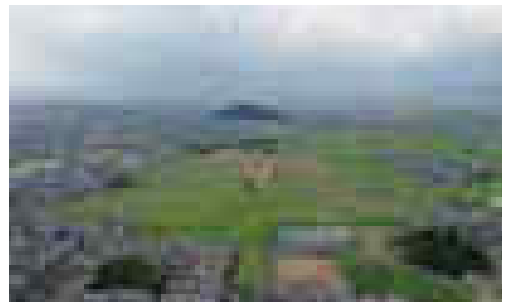
藤原宮跡は、飛鳥宮の北西に広がる平地において、約5km四方という広大な範囲に造営された藤原京の中心に位置する宮殿跡です。東・西・北の三方を大和三山（香具山・畝傍山・耳成山）に囲まれています。これは「三山鎮護」という新しい思想を反映したものと考えられています。

藤原宮へは、持統天皇が694年に飛鳥浄御原宮から遷宮しました。その後、710年に元明天皇が平城京へ遷都するまでの17年、持統天皇、文武天皇、元明天皇の3代にわたって継続して宮殿として使用されました。

約1キロメートル四方を濠と大垣が取り囲み、その内部に天皇たちの居住空間である内裏、天皇の儀式的空間である大極殿院、官人たちの政務の場である朝堂院、そして飛鳥宮の時代には宮の内外に分散していた行政の場である官衙が集約して一体的に配置されました。

宮殿の中心である大極殿をはじめ、中軸線上に配置された大極殿院や朝堂院は、瓦葺きの礎石建物が、宮殿では初めて導入されました。しかし、大極殿の後ろ側に設けられた内裏の建物や、宮殿の東西に配置された官衙の建物は、飛鳥宮と同様に日本に古来からある掘立柱建物でした。

藤原京は、中国式の条坊式都城として造営されましたので、その中軸には



メインストリートである朱雀大路が敷設されていました。藤原宮の南辺の朱雀門から南へと延びる朱雀大路は、発掘調査の結果から、その道幅が約24メートルと推定されています。

藤原宮の構造や建物の配置、朱雀大路を中軸とした藤原京の都市区画は、その後の平城京や平安京に継承されるなど、日本の都城制の基準となりました。

藤原宮跡では今も毎年発掘調査が行われており、そのたびに、新たな発見が報告されています。



左下 藤原京復元模型(榎原市提供) 右上 藤原宮跡全景



香具山は、藤原宮の東に位置しています。南東にある多武峰から延びた尾根筋が浸食によって独立した形になった標高152.4mの小丘陵です。

「天の香久山」とも称されるように、天から降りてきたという伝承が「風土記」や「万葉集」に記されており、神聖視されていたことが分かります。

また、「万葉集」には舒明天皇が香具山に登って国見をした時の歌が収録されていることから、三山のなかでも最も重要視されていたことがうかがわれます。

藤原宮と香具山の朝焼け  
(世界遺産「飛鳥・藤原」登録推進協議会提供)



畝傍山は、藤原宮の西に位置する標高199.2mと三山では最も高い独立小丘陵です。200万年前の火山活動で噴出された火山岩が侵食されて形づくられた山と考えられています。

「古事記」や「日本書紀」、「万葉集」にも多く登場しています。中大兄皇子(後の天智天皇)が詠んだ万葉歌には、香具山と耳成山が「雄々しい」畝傍山をめぐる相争ったとあり、三山で最も高い山容が、古代の人々に勇ましいものだと感じられていたことが分かります。

畝傍山遠景(世界遺産「飛鳥・藤原」登録推進協議会提供)



耳成山は、藤原宮の北に位置する標高139.7mの小丘陵です。どの方角から眺めても、きれいな円錐形をしており、畝傍山と同様に火山岩が侵食されて形づくられた山と考えられています。

「みみなし」という名は、山裾が延びない丸い形をしたその山容が由来とも言われています。

「日本書紀」の推古天皇9年(601)の記事に耳梨行宮という施設の名前が出てきており、周辺が古代から重視される地域であった可能性があります。

池に映る耳成山(世界遺産「飛鳥・藤原」登録推進協議会提供)

